

2019・2020年度 都市環境デザイン会議 公募型プロジェクト

〈全国大会 2021 in 丸亀〉

プロジェクト発表 梗概

2021年9月17日

発行：都市環境デザイン会議

2019年2020年JUDI公募型プロジェクト助成金 〈全国大会2021in丸亀〉
プロジェクト発表プログラム

9月17日(金)		備考
15:00～ 15:05	趣旨・発表手順の説明(高森理事)	兼司会
15:05～ 15:23	発表①(柳田 良造) 参道の環境デザインセミナー	中部ブロック
15:23～ 15:41	発表②(石原 凌河) 新型コロナウイルス禍に関する 都市環境デザインの観点からの考察	関西ブロック
15:41～ 15:59	発表③(石原 凌河・森 颯太) 盛り場環境デザイン研究会 ー盛り場の変遷に関する研究ー	関西ブロック
15:59～ 16:10	休憩(11分)	
16:10～ 16:28	発表④(高谷 時彦) 鶴岡まちなかキネマ再生に向けた市民連携活動	東北ブロック
16:28～ 16:46	発表⑤(齊藤 浩治) 醗酵文化から読み解くまちの姿	東北ブロック
16:46～ 17:04	発表⑥(岸田 文夫) 都心居住時代のコミュニティの場としての 都市公園の研究 ー大阪市扇町公園を事例にして	関西ブロック
17:04～ 17:15	総括(長沼理事)	

注)各発表の持ち時間は、説明13分+質疑応答5分=計18分。

参道の環境デザインセミナー

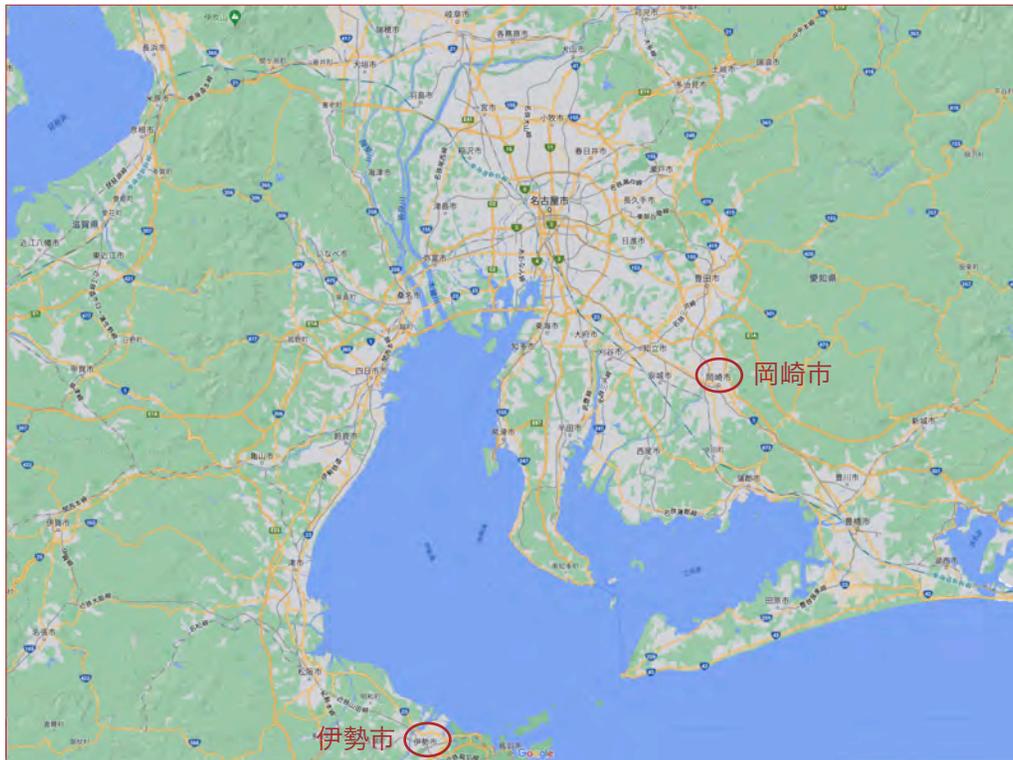
中部ブロック 柳田良造

1. はじめに

中部JUDIは旧街道、ローカル線という地域をめぐる「線的」な空間の環境デザインセミナーを行い、地域空間の隠れた文脈をさぐり、その意味を再定立する取り組みを行ってきた。今回申請するのは「線的」空間企画の第3弾、「参道」の環境デザインセミナーである。「参道」とは言うまでもなく、神社や寺院に参詣するために通る道のことである。参詣のための道であるが、地域や都市空間でのシンボリックな意味をもち、またそれによる人を誘引する力を有する道である。参道に着目する理由は、都市の軸、特に近代以降の都市改変のなかで失われ、見えなくなったその都市の本来もっている重要な軸の再発見をめざし、もうひとつ、通りの賑わいと言われるものがある種の参道空間としての賑わいではないのかという視点から、さぐり、捉え直すものである。「参道」としての意味をさぐり、地域に調査で訪れることは空間、暮

らし、歴史のトータルな文脈の中で地域の場所を体験することである。「参道」の環境デザインセミナーは地域の暮らしや人との出会いのなかでその魅力を探り、環境のもつ構造とそのあり方を考えるものである。

当初は去年までやっていた「ローカル線の環境デザイン」のようなツアー型のセミナーを計画していたが、コロナ禍の拡大で開催が困難になった。事業の中止あるいは延期も考えたが、検討の結果、現地調査と文献資料の分析による研究型の計画に変更した。計画変更になったが、企画の内容をほり下げる方法としては、かえってよかったかなと思えるような成果を生むことができた。対象としたのは三重県伊勢市での伊勢神宮内宮、外宮などの参道と愛知県での徳川家康生誕の地岡崎での岡崎城天守をビスタとする軸、伊賀八幡宮の参道などである。



調査都市 伊勢市と岡崎市の位置

2. 伊勢の参道と都市軸

この企画で最も注目した伊勢市には伊勢神宮内宮の参道（おかげ横町も含む）、外宮の参道、二見ヶ浦海岸の参道、伊勢の台所と言われた伊勢河崎の参道的路などの4カ所の参道空間がある。伊勢を訪れたのはおよそ半世紀ぶりであったが、参道のいずれもが都市空間の中での文脈を失い、断片化して、部分的なスポットをつくりあげているだけの環境になっていると感じられた。地域として、都市デザインとして一体どうしてしまったのだろうかということが率直な感想であった。

この疑問を解く鍵というか、面白い資料を文献探索の中で見つけた。【實地踏測 参宮案内地図】（大正6年（1917）の古地図と主要ポイント毎の写真が一体となって示された資料（「三重県伊勢ぶらり」）である。まず伊勢の地図として眺め方だが、その資料では下が海側（地図としては南が上になる）で、中央に鉄道が走り、上側に外宮、内宮が山懐に位置するように描かれている。真ん中に山田駅（現伊勢市駅）があり、駅前からの町並み写真では3階建ての木造大旅館や土産物店が連なり路面電車の走る通りが、賑わっているのがわかる。



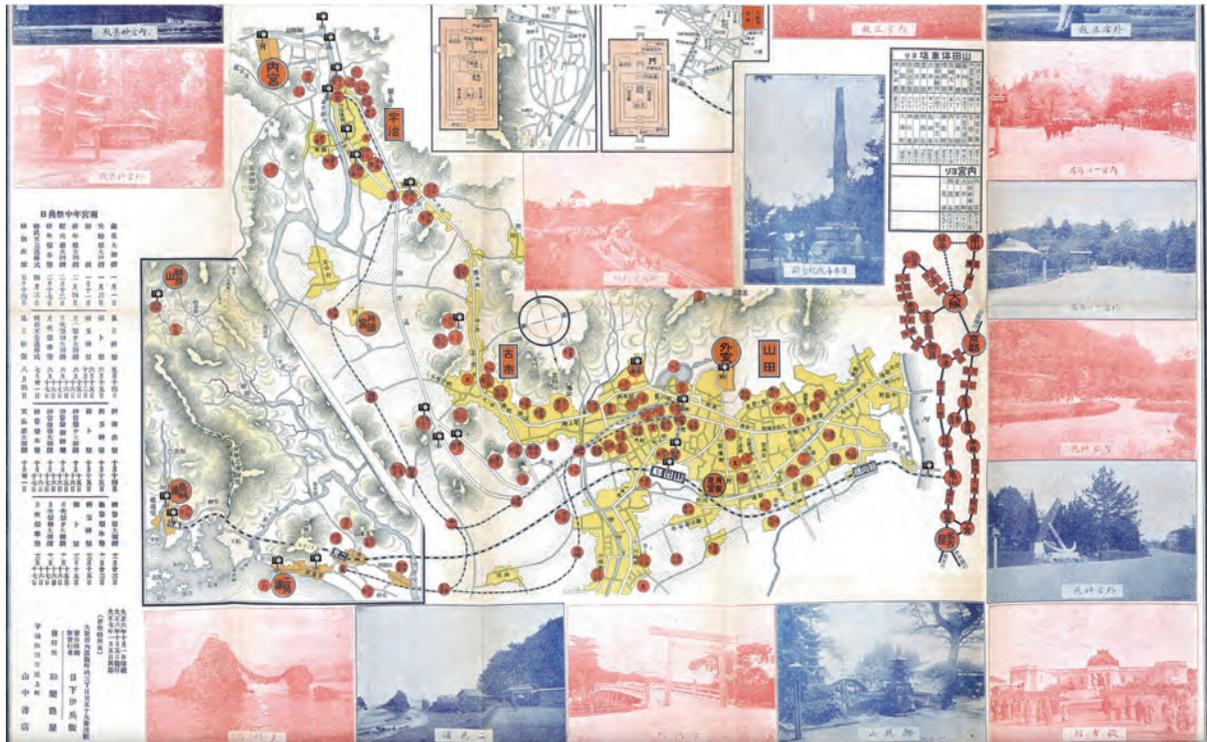
大正期 路面電車と山田駅前通（現伊勢市駅）



昭和初期 山田駅前通



現伊勢市駅 駅前通



【實地踏測 参宮案内地図】大正6年（1917年）提供「皇學館大学館史編纂室」（伊勢ぶらり収録）

高倉山を正面に都市軸的な参道として外宮に向かって伸び、駅前通りの外宮に達する角(外宮から内宮に通じる御幸通の起点でもある)に、明治村に移築された名建築の宇治山田郵便局庁舎が写真に写っている。明治村で何度も見た建物だが、こういうロケーションで建っていたのかと驚く。明治42年(1909)竣工、設計は通信技手白石圓治。木造平屋建銅板葺で中央に円錐形の屋根き、両翼屋は寄棟屋根、正面の左右には小ドームの載る角塔を建てている。外装はハーフティンバー様式で、漆喰塗と下見板張の壁が使い分けられた愛らしい建物で、重要文化財である。



1915年(大正4年)作成

外宮入口と宇治山田郵便局庁舎

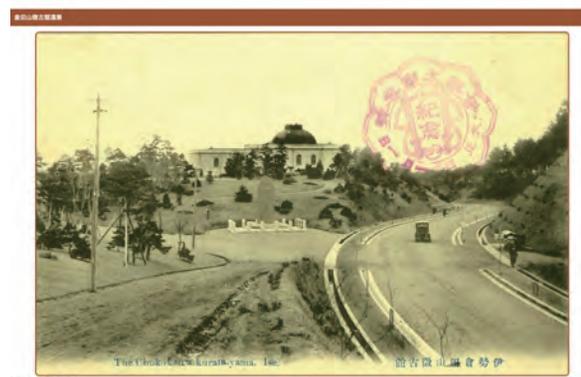


宇治山田郵便局庁舎の建っていた場所の現状



明治村の宇治山田郵便局庁舎

内宮の位置する宇治地区に目を転ずると、明治43年(1910)にできた外宮から内宮への御幸通に沿って、倉田山の神宮皇學館や神宮徴古館、農業館、神社本庁群が露払いのように前面を固め、その奥深く神路山の麓まで参道が伸び、内宮に位置する。おはらい町付近までは御幸通に路面電車が通じて、大正期の参拝者は路面電車で内宮の近傍までアクセスできたのである。内宮と外宮の間の旧道沿いには日本の3大遊郭の一つと言われた古市遊郭が誕生し、大変な賑わいだったと言われる。



1915年(大正4年)作成

御幸通と徴古館



現状の御幸通・徴古館は繁った木に隠れる



徴古館のある倉田山周辺の現状

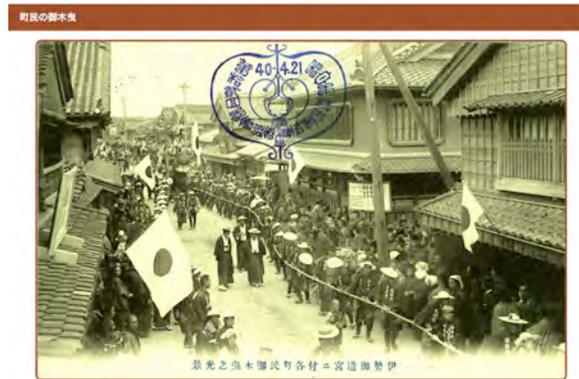
お伊勢参りの旅人はまず汐水で禊をしたと言われる二見ヶ浦への参道、伊勢台所と言われた瀬田川沿いの河崎の賑わい、町並みや位置と軸性の関係も資料の地図からはよく読み取れる。近世までのお伊勢詣は徒歩での旅であったが、明治に入り鉄道の普及が進み始めると、神都・伊勢への鉄道開通の重要性も指摘され、明治23年(1890)に参宮鉄道が設立し、名古屋・京都～山田(現伊勢市)間の全通に続き、明治33年(1900)には湊町(現JR難波)～山田間で直通運転が開始された。市内の道路整備にあわせ、乗合馬車に続き、当時市内の電気供給事業を行っていた宮川電気が三重交通「神都線」として路面電車を開業し、明治末期から大正にかけて山田駅・外宮前・内宮前・二見浦を結んだのである。戦前、伊勢詣の観光客は年間800万人と言われ、伊勢の商業、観光地としてのインフラ整備と町並み形成は、一地方都市のレベルを超え、京都や東京浅草などに匹敵するものであった。大正8年(1919)の吉田初三郎が描いた「伊勢名所圖絵・参宮要覧」も資料の地図と同様の構図で伊勢が描かれている。

昭和10年代、伊勢では国家主導の「神都計画」と呼ばれる都市計画事業が進められるが、その事業は大半が未完に終わった。「神都」伊勢は米軍空襲の格好の目標となり、市街地の50%以上を失い、伊勢詣の観光客も84万人まで激減する。

戦後、伊勢神宮は一宗教法人になり、戦後復興とともに観光地伊勢の再建と市街地形成が進む。地域としての特別な意味を失った市街地では、外宮の参道は拡幅されどこにでもあるような駅前通となり、内宮では周辺まで宅地開発がスプロールし、高速道路までが地域を分断するように造られていくことになるのである。

そういう中で、当時の写真に近い町並を形成維持しているのは内宮参道のおは

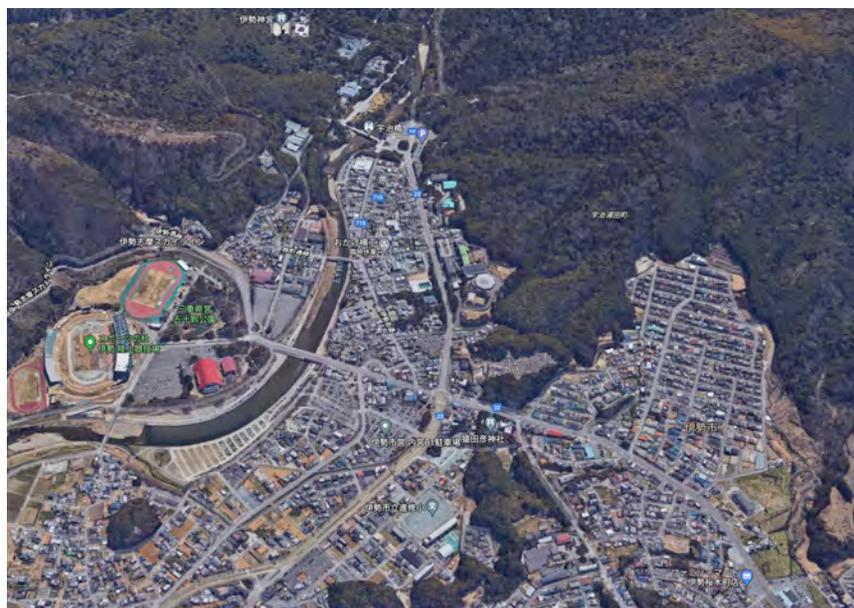
らい町である。戦後、商店街近代化の波をうけ、「伊勢らしい建物」失っていたおはらい町は、観光客も20万人にまで落ち込む大きな危機を迎えた。そういう状況に対し、危機感を抱いた「赤福」らの店主たちが立ち上がり、1980年代以降伊勢の伝統的な町並みの再生が始まり、ほぼすべての建物が切妻・入母屋・妻入の木造建築に整備されたまちづくりの成果なのである。



1907年(明治40年)作成
明治期の式年遷宮の念おはらい町での御木曳き



おはらい町の現状



スプロールが押し寄せる内宮周辺の航空写真

3. 岡崎の参道と都市軸

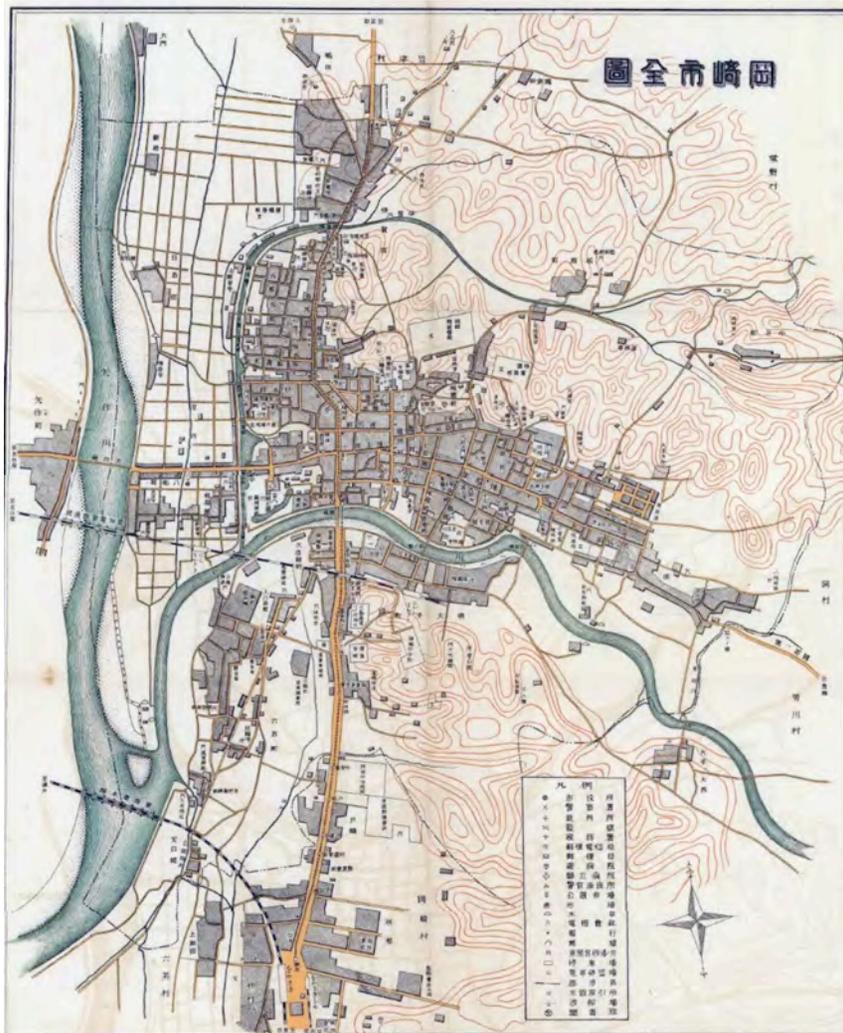
徳川家康の生誕地である岡崎は、岡崎城が南北に流れる矢作川とその支流である菅生川（現乙川）の合流地点の丘陵に位置している。旧東海道は城の北側を東西に通る、岡崎名物の八丁味噌は城から西の矢作川方向に八丁行ったところにあるところからその名が生まれたように城が地域の空間デザインの核となってきた。明治に入り、国鉄岡崎駅が岡崎市街地から南に3km以上も離れたところ立地したため、岡崎駅と市街地を南北につなぐ道路がつくられ、路面電車が明治32年(1899)に誕生する。路面電車のルートは市街地の北まで伸び、南北の都市軸が誕生する。そういう明快な軸性をもった都市空間の姿が、大正13年(1914)の岡崎市土木課作成の地図に示されている。

岡崎の都市空間の中で、岡崎城と並ぶ重要な歴史的核が城から北に3kmの大樹寺である。大

樹寺は桶狭間の戦いで今川勢として破れた家康が逃げ延びた寺として有名であり、徳川氏の菩提寺であり、歴代将軍の位牌が安置されている。その大樹寺から岡崎城へのビスタライン（大樹寺から岡崎城天守を見通す約3kmの直線の眺望軸）が現在も見事に保全されているのである。大樹寺と岡崎城が地形的に台地の端部に位置し、その間が低地であったという地形的特徴も幸い



大樹寺から総門越しに岡崎城天守を望む



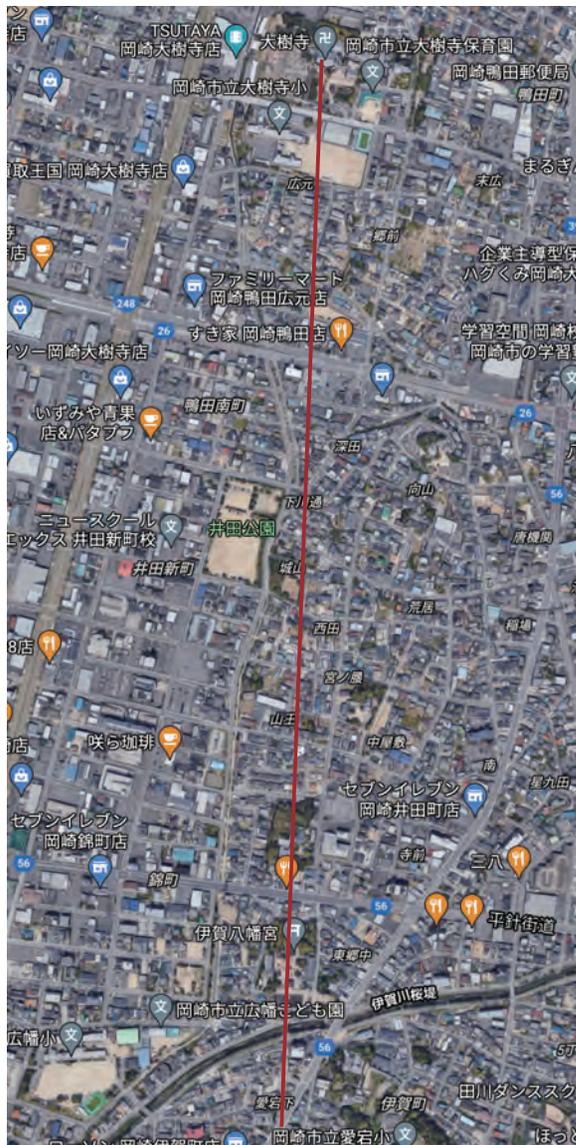
大樹寺と岡崎城のビスタライン
 新行紀一「岡崎市行政アドバイザー・レポート 岡崎市内の『歴史的景観』の維持のために」(平成22年3月)より

岡崎市土木課地図
 大正13年(1914)

し、大樹寺の門から城が真っ直ぐに見える歴史的眺望が約370年間守られてきているのである。

また大樹寺と城のほぼ中間で伊賀川の畔に位置する伊賀八幡宮は松平氏神として創建され、徳川家康が社殿を改築し、更に三代将軍家光が拡張し祖父家康を祭神に加え、家康の命日には将軍の名代として岡崎藩主が代参することが慣習となっていた由緒ある神社である。その参道は伊賀川を挟んで南北に延びるが、その軸線が八幡宮を超え大樹寺にまで達しているのを地図分析から発見した。岡崎での大樹寺の重要性を示すものであろう。八幡宮の鳥居前を路面電車が通る時代の写真がある。通りの場所性と軸性を表現しているという意味で面白い写真である。

路面電車は昭和37年(1962)に廃止され、



伊賀八幡宮の参道の大樹寺への軸線



伊賀八幡宮の参道前を通る路面電車(昭和30年代頃)名鉄資料館:岡崎市内線写真展)と現状

市街地の南北方向の明快な軸性が薄れている。

市街地では大正12年(1913)、乙川左岸に駅(現名鉄東岡崎駅)が誕生し、市の中心駅の役割を担う。その近傍の乙川では、近年河川敷遊歩道や船着き場、木の橋上公園「桜城橋」、川岸テラス形式の商業施設などが誕生、城、市役所、駅を市街地中心部をつなぐ水辺空間として環境的にも都市軸的に魅力的な場にもなっている。



乙川のプロジェクト

4. まとめ

伊勢、岡崎での「参道」の研究は大正期の都市地図発見を手がかりに、現地調査も発見の連続であった。その背景を文献資料で裏付ける分析作業もまた興味深いものであった。好対照とも言える二つの都市での「参道」と都市軸空間の形成は改めて都市デザインの重要性を再認識させられる企画であった。

新型コロナウイルス禍に関する都市環境デザインの観点からの考察

関西ブロック 石原凌河

1. はじめに

新型コロナウイルスによるパンデミックは現代社会に大きな影響を与え、人類は対応を強いられている。その方針や具体的な方法は地域によって様々で、時間と共に変化もしているが、これをきっかけとして、都市や生活に何らかの変化が起きて定着すると思われる。しかし、それがどのようなものになるのか不明である。

本プロジェクトでは、2020年4月頃からの都市や生活の変化を観察しながら、新型コロナウイルスの感染拡大がもたらす影響およびその終焉後の都市状況に対応した都市環境デザイン上の課題について考察した。

2. 研究会の概要

2020年6月からプロジェクトを発足し、概ね2ヶ月に1回程度で研究会をオンラインで開催して進めていった(図1)。新型コロナウイルス蔓延下の都市空間の利用変化、感染拡大からの街の復興過程、地域構造の見直し論、新たな都心空間・公共空間論、集客型都市政策の見直し論など新型コ

<p>【第1回 6月17日(水) 19:00~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武田重昭氏から学芸出版社に寄稿された論考に関する報告 ・研究会の進め方に関する意見交換 <p>【第2回 7月30日(木) 19:00~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Scrapboxに投稿した内容に関する意見交換 <p>【第3回 9月4日(金) 19:00~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Scrapboxの記事の分類に関する意見交換 <p>【第4回 10月9日(金) 19:00~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポストコロナ社会で予測される近未来像に関する意見交換 <p>【第5回 11月17日(火) 19:00~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Scrapboxの記事の修正に関する意見交換 ・コロナ禍でのイタリアの被災状況に関する報告 <p>【第6回 2月12日(金) 18:30~】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果とセミナーの企画に関する意見交換
--

図1 研究会の概要

ロウイルスの感染拡大の影響や都市環境デザイン上の課題については多岐にわたる。そのため、研究会メンバー(図2)が関心のある話題についてScrapbox(図3)へ投稿してもらい、それを基に研究会メンバーで議論を深めていった。Scrapboxに投稿された内容(図4)からテキストデータを抽出し、テキストマイニングにより共起ネットワーク図を作成した(図5)。これを見ると、アフター・コロナでの地域行事の形態のあり方、デジタル時代の将来構想、オープンスペースの将来像、屋外も含めた居住環境や土地利用のビジョン、アフター・コロナでの大都市一極集中の解消、国土構造の再編などの話題が多くなされたことが伺える。

- 石原凌河 (龍谷大学政策学部准教授)
- 井口勝文 (INOPLAS 都市建築デザイン研究所)
- 岡絵理子 (関西大学環境都市工学部教授)
- 角野幸博 (関西学院大学建築学部教授)
- 武田重昭 (大阪府立大学大学院生命環境科学研究科准教授)
- 鳴海邦碩 (大阪大学名誉教授)
- 藤川敏行 (株式会社竹中工務店開発計画本部)
- 堀口浩司 (株式会社地域計画建築研究所副社長)
- 松本邦彦 (大阪大学大学院工学研究科助教)
- 山納洋 (大阪ガス株式会社近畿圏部都市魅力研究室室長)
- 若本和仁 (大阪大学大学院工学研究科准教授)

図2 研究会メンバー



図3 Scrapboxの画面

<p>「郊外住宅地」</p> <p>「健康住宅地」というコンセプトが復活する。庭へのあこがれが再燃する。一部の郊外住宅地は人気を取り戻すきっかけとなる。拠点（タウンセンター、最寄り駅前など）に、個室型・ブース型サテライトオフィスやシェアオフィスが生まれる。核/生活拠点に頼らない暮らしは実現するか？ コンビニでビジネスサポートサービスが充実する。空地や空家の暫定利用ニーズが生まれる。クラウドワーキングのサイドビジネスが増加する。高齢者見守りビジネスが増加する。高齢者施設や介護施設で遠距離の子供家庭とのコミュニケーションサービスが発達する。散歩ルートや気分転換の場が増える。 #郊外 #居住</p>
<p>「盛り場の変化は？密なパー」</p> <p>密なパー、小さな店舗である。飲食施設といってもまたちよつと違う、とにかく情報がない、少ない、取り残されている。接触を減らすといっても、キャッシュレス化などの遅れもあるし、アクリルシールド、マスク、お客同士の離隔距離なんて確保できないので、やっぱり密が回避できない。でもいまできることがあるはず！営業時間の分散化？昼間にやってみるか？店主のアイデア、商品のウォッカ（強烈）で手の消毒……。アフターコロナのスタイル予想は、やっぱり従来通りか、なじみの「居心地のいい」場所への回帰を予想する。 #飲食店・盛り場 #ライフスタイル</p>
<p>「都心居住のメリットの増加」</p> <p>通勤電車での感染リスクから自転車通勤、徒歩通勤が増えました。郊外住宅の中でのワークスペース確保の増加と逆に、都心居住も増えるかもしれません。緊急事態宣言の時期、長時間通勤の人は出社日をへらし週の一部を在宅勤務。近距離の人はパーソナルな交通手段を用いて、半日出社など多様な「働き方改革」が社会的にも許容されるようになったのが、大きな変化でしょう。 #都心 #居住 #ワークスタイル</p>

図4 Scrapbox に投稿された内容の例

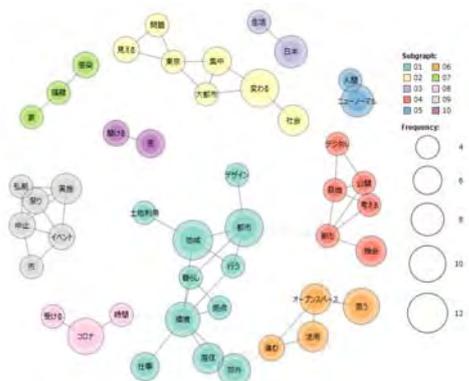


図5 Scrapbox の記事の共起ネットワーク図

3. 国際セミナーの開催

このように研究会では新型コロナウイルス感染症に関する様々な議論を行ってきたが、海外の感染状況を数値やそれを象徴するような映像で知る

ことはあっても、ロックダウンされた都市での生活の状況や、政策に対する市民の受け止め方といった物語的な情報に触れる機会はあまりなかった。しかし、世界的な感染拡大から1年以上経過した現在、生活や行動を振り返り、定性的な情報も把握しておくことが、定量データの意味を読み解く上でも、今後の都市や生活を考える上でも、重要ではないかと考えた。

そこで、国際セミナーを2021年6月12日(土) 10:00~12:30 にオンラインで開催した。このセミナーでは、状況の異なる日台伊米を事例にCOVID-19により都市や生活に何が起き、何が起きようとしているのかを報告し、比較・議論することで、これからの都市環境デザインの手がかりを探ることを目的とした。本プロジェクトのメンバーである若本和仁氏からは、本セミナーの報告対象である日本、イタリア、台湾、アメリカの4カ国のコロナの感染状況について報告いただいた。

同じくプロジェクトメンバーである井口勝文氏からは、コロナ拡大中の日本とイタリア往復の経験や、コロナ禍で観察した日本とイタリアでのオープンスペースの使われ方の違い、コロナ禍での日本とイタリアの市民社会の意識の違いについて報告いただいた。台湾・東海大学の蘇睿弼氏からは、台中旧市街地でのコロナの影響やアフター・コロナでの都市再生の可能性などについて報告いただいた。立命館大学の式王美子氏からは、ロサンゼルスでの滞在を通して実感した社会経済空間的側面からのコロナの影響について報告いただいた。国際セミナーは時差の関係で土曜日の午前中に開催したにも関わらず、全国から40名以上の方々にご参加いただいた。なお、本セミナーの報告書は JUDI 関西ブロックのホームページ (<http://judi.sub.jp/judi/202106semi.pdf>) から閲覧できるので、詳細は報告書を参照されたい。

4. まとめ

本プロジェクトでは、新型コロナウイルスの感染拡大がもたらす影響と終焉後の都市状況に対応した都市環境デザイン上の課題について考察した。新型コロナウイルスによるパンデミックは現在進行形で続いているため、今後も状況を観察しながら考察を深めていきたい。

盛り場環境デザイン研究会

～盛り場の変遷に関する研究～

関西ブロック 石原凌河

1. はじめに

(1) 本プロジェクトの背景・目的

安全で楽しく酔えるための環境をデザインすることは都市環境デザインにおける主要なテーマである。魅力的な都市には優れた盛り場環境が形成されており、盛り場環境のあり方を問うことは都市のアイデンティティの根幹をなすものである。都市の縮小が進む現代においてはチェーン店が増え、個性のある酒場が失われつつある。さらに、京都や大阪などの大都市部においては観光客が急激に増えたことによりジェントリフィケーションが進んだことも、画一した盛り場環境に拍車をかけつつある。このように盛り場のあり方を捉え直し、現代における魅力的な盛り場環境について検討することは喫緊の課題である。また、本プロジェクトの活動期間中に、新型コロナウイルスによるパンデミックが脅威をふるい、私たちの生活や経済に多大な影響を及ぼした。特に飲食店への影響は大きいことは衆目の一致するところである。コロナによる影響は長期的かつ漸的に影響を及ぼす。飲食店が集積する盛り場はその街の顔であるが、飲食店に多大な影響を及ぼすことになれば、総体としての盛り場も大きく変容することが想定され、都市のアイデンティティを揺るがしかねない事態となり得る。コロナの感染拡大以前から、個性のある酒場が失われつつあり、魅力的な盛り場環境の衰退が見られる状況であったが、コロナの感染拡大が拍車をかけて盛り場が一層の変容・衰退をもたらす可能性が高い。コロナの感染拡大・維持期（ウィズ・コロナ）のみならず感染収束後（アフター・コロナ）において、魅力的な盛り場環境を再構築することは喫緊の課題である。コロナ禍での盛り場環境を検討するためには、飲食店の休業・廃業や店舗の移り変わりなどを長期的にモニタリングしながら、盛り場の変化を捉える必要があると考える。

本プロジェクトでは、京都の盛り場である木屋

町・先斗町エリアを事例に、現代においてどのような特徴の酒場が増え、盛り場環境がどのように変遷してきたのか、過去の盛り場との比較分析により考察する。また、コロナ禍が盛り場に与える影響を先斗町での定点調査から明らかにする。

(2) 調査の方法

1970年に発行された木屋町・先斗町エリア盛り場マップと2019年の現況（現地調査や住宅地図を参照）を比較しながら、盛り場がどのような変遷を遂げてきたのかを明らかにした。また、1970年から現在まで営業している業種の異なる5軒の店舗（スナック、バー、飲食店、居酒屋）に取材を行い、開店当初から現在までの先斗町の変遷について定性的に明らかにした。

コロナ禍が盛り場に与える影響を明らかにするために、1回目の緊急事態宣言（2020年4月7日から5月24日まで発令）の解除後の2020年5月30日から木屋町・先斗町エリアでの定点調査（図1の範囲）を現在まで継続的に実施し、対象地区の住宅地図データを基に目視で開店・休業・閉店の状況を把握している。

2. 調査の結果

(1) 1970年とコロナ禍前の比較

その結果、お茶屋とスナック・バーの軒数は減少したものの、飲食店とビル・複合店の軒数は増加していることが伺えた。また、1970年当日にはなかった宿泊施設も3軒立地するようになった。飲食店の多くは英語表記のメニューや看板が掲げられていることから、地元客を対象にした店舗よりも外国人観光客をターゲットにした、いわゆるインバウンド型店舗が増加していることが明らかとなった。

(2) コロナ禍での盛り場の変遷

2020年5月末の調査結果によると、飲食店、スナック・バー、居酒屋では、通常営業の店舗数よりも休業している店舗数が相対的に多いことが把

握でき、コロナ禍により半数以上の飲食店が休業を迫られたことが確認できた。短縮営業を行っている店舗も一定数見受けられた。2020年6月末の調査結果によると、全ての業種において休業中の店舗数よりも通常営業の店舗数が相対的に多いことが把握できた。緊急事態宣言が解除され、コロナの感染収束が見られたことから、6月前後から再開した店舗が増えたためだと考えられる。ただし、営業を再開した店舗の大半は、ソーシャル・ディスタンスの張り紙やマスク着用必須、消毒液の設置、席の間隔をあけるなどの感染防災対策に取り組んでいたことが現地調査から確認できた。2020年7月末の調査結果によると、大半の店舗は通常営業を行っており、短縮営業や休業中の店舗は相対的に少ないことが把握できた。ただし、現地調査によると、ほとんどの飲食店で営業していたものの、木屋町・先斗町には人が少なく、賑わいがほとんど見られず、盛り場全体が閑散としている状況だった。2020年8月末の調査結果によると、7月に入ってコロナの感染が再度拡大したことにより、休業する店舗が増えたことが確認できた。しかし、短縮営業の店舗はほとんど見られなかったことから、通常営業を維持するか休業するか二択を迫られた店舗が多かったと推察される。2020年9月末の調査結果では、8月末時点と比較すると休業中の店舗数が減少し、通常営業の店舗数が増加したことが確認できた。再度のコロナの収束が見られたことから、通常営業に戻った店舗が増えたと考えられる。一方で、廃業している店舗も徐々に増えてきたことが確認できた。

3. まとめ

本プロジェクトでは、京都の代表的な盛り場である木屋町・先斗町エリアを事例に、現代においてどのような特徴の酒場が増え、盛り場環境がどのように変遷してきたのかを明らかにするとともに、コロナ禍が飲食店に与える影響について見ていった。コロナの影響が今後も続くことで、感染拡大・収束の状況に依らず、廃業店舗が増えることや、店舗の業種が変化するなど、盛り場の環境に大きな影響を与えるものと考えられる。コロナ禍での盛り場環境の変化を把握するためにも、今後も継続的に調査を進めていく。

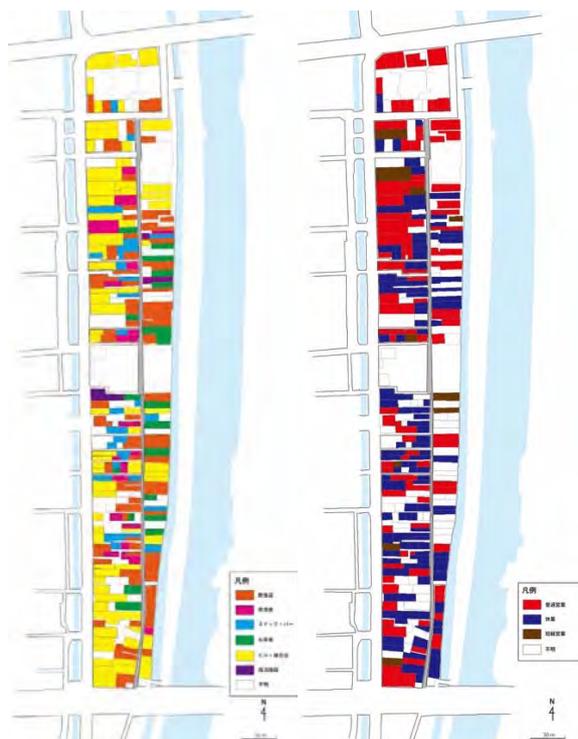


図1 (左図) 先斗町・木屋町エリアの店舗形態

図2 (右図) 2020年5月末時点の営業形態

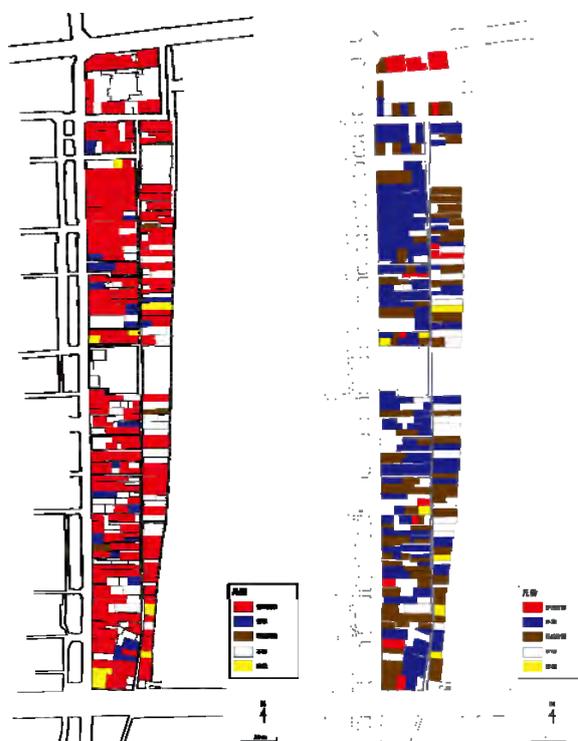


図3 (左図) 2020年10月末時点の営業形態

図4 (右図) 2021年8月末時点の営業形態

鶴岡まちなかキネマ問題の創造的解決に向けて

東北ブロック 高谷時彦

1. はじめに

2020年5月、鶴岡まちなかキネマ(以下、まちキネ)が閉館となり、同時にまちなかキネマの設立以来の支援者であり、また債権者でもある荘内銀行から(株)まちづくり鶴岡(運営会社)を清算する方針が発表されました。多くの市民が心配し、「まちキネの存続と再生を願う会」(代表:山形大菊池俊一准教授)には1万人を超える署名が集まりました。そのような状況の中で2020年11月、鶴岡市から「旧鶴岡まちなかキネマの今後の活用について」(以下活用案)という方針が示され、現在(2021年5月)その案に基づいて関係者が動き始めています。

私は、関係者のご尽力に対して、心から敬意を表すものですが、同時に、計画案の中身や策定プロセスには課題が多く、今後、市民や専門家とともに、少しでも良い方向に変えていきたいと願っています。

2. 誕生から閉館に至るまで

2006年、山形県鶴岡市(人口12万人)の中心部にあった合繊工場の郊外移転が決定し、3000坪の跡地が売りに出されました。このまとまった敷地を購入して生活文化の場として開発し、中心部再生につなげたいと考えたのが、鶴岡商工会議所副会頭、荘内銀行頭取の國井英夫氏です。

私たちは工場移転に伴って壊す予定であった木造平屋建築(のちに絹織物工場であったことが判明)をリノベーションして映画館にすることを提案しました。また、その隣にある2棟の大型工場(鉄骨鉄筋コンクリート造)は当面残しておき、将来的に産業文化遺産建築群としての総合的な活用を行っていくこととなりました。案を実現すべく翌2007年には荘内銀行の主導で鶴岡商工会議所会員が出資して(株)まちづくり鶴岡が発足しました。「絹織物の産業文化遺産で映画が愉しめるまち鶴岡」のスタートです。

映画館には、郊外型シネコンや大都市の名画座、

あるいは単館で頑張る地方都市コミュニティ型映画館などいろいろなタイプがあります。まちキネはそのいずれでもない独自のものを目指しました。規模やスクリーン数など手探りでしたが、映画パーソナリティの荒井幸博氏から、運営しやすいキャパシティやスクリーン数についてアドバイスをいただく中で、キネマ1(165席)、キネマ2(152席)、キネマ3(80席)キネマ4(40席)の4スクリーンと広く市民に開放された多目的ホールからなるまちキネの姿が浮かび上がってきました。

開館してからは支配人のもと、4スクリーンをフル活用して、1日当たり24上映機会、10~12作品の併行上映を実行し、すべての配給メジャーとの厚い信頼関係を築き上げました。地方都市では大都市の名画座のような固定ファン層に期待することはできません。新作、旧作、超大作、ミニシアター系、アニメなど多様な選択肢を用意しながらの工夫に満ちた運営を行いました。またデマンド上映、ODS(アザーデジタルスタッフ/ソース)や映画祭など多様な劇場運営を行うだけでなく、ステージがあることを活用した落語会、舞台挨拶、演奏会、シンポ会場など多目的な利用にも特徴があります。多目的ホールはカフェ、コンセッション、イベント、展示販売、コンサート。映画とのコラボイベントなどに活用されました。荘内銀行員の館長の下で多い年には、年間8万人、売上1億円の実績を積み上げてきました。どこにもないまちキネモデルの経営とってよいのではないのでしょうか。

また、歴史的建築である絹織物工場を個性的な映画館スペースや多目的ホールに作り変えた発想やデザインは建築やまちづくり関係の雑誌などで広く取り上げられるだけでなく、日本建築学会作品選奨、BELCA賞など国内外の賞の対象となり、実務家や建築学生の教科書でもある建築資料集成にも収録されています。以上の経緯は、『ソーシャルビジネスで地方再生』(渋川智明著、ぎょうせい2012)などに詳しく紹介されています。

しかし2020年4月には、メガバンク出身の頭取

による体制へと変わりました。その直後の5月に閉館が決定、同時に土地建物を売却し、㈱まちづくり鶴岡を清算する方針が発表されました。コロナ禍ということもあり、土地取得代や、建築費などの初期投資費用が回収できる見込みがない以上、㈱まちづくり鶴岡が所有する土地建物を買ってもらったうえで、不良となった債権を処理しようということなのです。

3. 市の活用案

上の状況を受けて発表された市活用案の骨子は次の通りです。

①まちづくり鶴岡の所有地と建物は鶴岡市社会福祉協議会(以下、社協)が㈱まちづくり鶴岡(荘内銀行)から取得。大きいキネマ1, 2及び多目的ホールの建築、諸設備はクリアランスし、事務室、会議室、介護ケアルームに改修する。

②小さなキネマ3, 4は「映像機能付交流スペース」(以下、交流スペース)として無償貸与する。映画館をクリアランスし、交流スペースとして使うための大掛かりな改修に必要な工事費の一部充填のため2500万円を公費(市と国費)で賄う。

③交流スペース運営は地元の山王商店街(山王まちづくり㈱)が担う。市は3年間にわたり800万円を支援する。

また、活用案で直接は触れていませんが、当初のまちキネ計画で、産業文化遺産としての総合的活用が予定されていた、空き工場2棟(この敷地は本原稿執筆時点(2021年6月)ではすでに壊されています)。

4. 市活用案の課題、代替案を検討する必要性

市活用案によると、常設映画館はなくなっても映像機能付きの交流スペースは残ります。また中心部に介護ケアを担う福祉施設が設置されることも、歓迎すべきものです。映画館はクリアランスされ、建物外観も変わるにせよ、全体が更地になるわけではありません。

また、交流スペースを運営する地元商店街リーダー、市のOBである社協理事長や鶴岡市長など関係者は、映画復活を願う多くの人に答えたい、また何とか更地になることを避けたいという思いで、

関係者合意と市活用案をまとめ上げました。

以上の点は私も高く評価するものですが、市の活用案にある様々な課題を指摘し、より良い案を提示することは、私たち専門家の役割だと考えます。以下に説明します。

①常設映画館の存続可能性を検討しないこと

市活用案の「映画上映機能を持つ交流スペース」は、常設映画館ではありません(常設となる可能性を否定するものではありません)。市活用案は、映画館の存続を検討することもなく、また、まちキネを運営してきた関係者や映画館興行者の声を聴くことなしに、地方映画館で最も使いやすい大きさとして設定した150席キャパの2つのキネマと多目的ホールのクリアランスを案の出発点としました。ここに第一の問題があります。

まちキネの閉館後、(少なくとも2つの)映画興行会社から、4館そのまま借りることができないかという問い合わせがきたそうです。まちキネは、初期投資分の債務を背負っていましたが、その債務がなくなれば、ランニングベースでは映画館の経営は可能ということです。もちろん荘内銀行にとっては映画館の存続ではなく、㈱まちづくり鶴岡の会社清算が第一目標ですので「土地建物を買わずに映画館を運営したい」という話は受け入れられないものでした。

しかし、公的な存在である鶴岡市社会福祉協議会が土地建物を購入してくれた時点で、事情はかわります。この広い敷地の中で、公的な社協の機能と文化的な映画館の機能が両立、共存する姿が描けないものか、少なくともその検討をすべきだというのが私の考えです。もちろん社協の投資金額と市の補助金の総額は当初の市活用案を超えないようにするというのが前提です。

②今ある建築の特性を生かす工夫をしないこと

私たちは、地球環境の危機を人口減少の中で迎えています。不必要なものを壊して新しく作ればいいという発想は、もうやめた方がよいと思います。望ましいリノベーションというのは、今ある建物や設備を十分に尊重し、できるだけうまく活用するということです。不要になったからと、既存の空間特性や魅力を考慮せず、使えないものは壊し、もとはまったく脈絡のない空間を新たに

作るというのは、20世紀的なスクラップアンドビルドの思想です。

2006年に私たちがまちキネの工場を再生しようと考えたときにも、工場建築のもつがらんどろ性を活かし、多目的ホールはそのがらんどろに光を取り込んでいく、またキネマにおいてはがらんどろの床を掘り下げて、がらんどろの中に独立した内箱（それが映画鑑賞空間：客席）をそっと挿入するという手法を取りました。工場建築の特性をそのまま生かしているから、新しい使われ方との対比が新鮮であり国内外の評価を得たのです。

まちキネの内箱は、地面を深く掘り下げて作られ、鉄筋コンクリート造と木造の二重壁に囲まれた高機能の「密室」です。密室は高性能の音場空間でもあり、高機能の諸設備を持っています（映画技術協会の賞もいただいています）。これを福祉施設として使用するには「密室」とは真逆の環境に作り変える必要があります。窓も必要となり外観も変わります。また、スプリンクラーや高性能の空調換気設備、照明、火災報知設備など（これだけで億単位の工事費がかかっています）も大掛かりな改造が必要です。学校の校舎をシェアオフィスとして使うといった類の改造とは質が異なります。

また、市活用案により、快適で使いやすい空間ができるのでしょうか。工場や映画館の雰囲気や空間の魅力とは全く隔絶した普通の小部屋群が生まれます。会議参加者が交流スペースを通らないといけないというのは大丈夫でしょうか。元気老人がますます増えていく時代に、少しの余裕もない間取りでよいのでしょうか。多額のお金をかけたにもかかわらず「これなら郊外で新築したほうが良かった」ということにならないことを祈ります。また、交流スペースには客だまりもありません。またコンセッション、販売、カフェ、イベントなどで、市民の広場になっていた多目的ホールもなくなります。

今あるものの特性を無視した改修は私たちが求めるリノベーションではありません。不必要なお金をかけて、プアーな空間を手に入れることは、関係者の本意ではないはずです。私たちは、今の空間特性、建築としての魅力を活かしながら活用する代替案があると考えます。

③税金でつくったものを税金でこわすこと、大量の廃棄物を生み出すこと

まちキネは中心市街地活性化計画の事業であり、建築にかかわる部分だけでも私の記憶では2.5億円前後の税金を使わせていただいています。市の活用案では、税金でつくった建物を、減価償却も終わらないうちに壊してしまうことになります。

また、映画館機能持つ内箱を設備とともに壊すことで多くの廃棄物を出します。鶴岡市は、国連SDGsのモデル都市ではなかったでしょうか？私もかかわりましたが、鶴岡市は数年前に、今あるものを活かした創造的な都市再生を詠うユネスコ創造都市のネットワークに加盟しました。今回の市活用案がその精神と大きく離れていることを危惧します。

④ビジョンがみえないこと、計画の過程が見えないこと、急ぎすぎていること

活用案は計画案ではなく、会社清算案です。市は総合的な視点で市民にビジョンを示す責任があります。民間企業の破たんを手を貸せないと市は繰り返します。また、「まちキネだけで解決しようとしてはダメです。視野を広げること、少なくとも隣の空き工場を含めて考えればずっと良い案になります」というと、「隣は関係ない、関係者合意はできている。時間がない」というのが市の回答です。

これまで、中心部の再生・活性化を担い、年間8万人の人を中心部に集めてくれたのは(株)まちづくり鶴岡という民間会社です。今回社協という公的な機関が中心部に広大な土地建物を所有することになりました。ここからは、市がきちんとしたビジョンを示すべきです。まちキネの事業は中心市街地活性化事業の一部であるということを忘れてはなりません。

5. 私たちの代替案：市民に選択肢を

後述する2020.11.29フォーラムに集った専門家と相談しながら、代替案をまとめました(Fig.5-1,2)。残念なことに、フォーラムで活用提案された産業文化遺産の倉庫2棟は壊されてしまいましたが、それでも敷地は十分に広いものです。社協会議室や事務室は駐車場部分に別棟を建てれば、自由な平面計画(間取り)と光にあふれる

職場環境ができます。介護ケアはキネマ1の空間特性をそのまま生かして活用します。多目的ホールとの間にあるテラスを活用すれば、心地よい元気老人の居場所が実現できるでしょう。映画館を壊して小部屋にするという無駄なお金をかけずに、同等の工事費で、あるいは補助金を上乗せすればさらに安く歴史的雰囲気を受け継いだ市民の居場所が中心部に確保されるでしょう。

この代替案によりまちキネは、山王商店街や地元有志が進めている「旧長山邸芭蕉ギャラリー計画(仮称)」ともつながります。山王商店街から芭蕉ギャラリーを経て、映画と福祉機能の融合するまちキネ文化ゾーンに至る、新しい中心部の姿が見えてきます。

提案では3つのキネマがそのまま残ります。この運営については、関心を示してくれた映画館運営会社などへのヒアリングを行ったうえで、山王まちづくり(株)も加わり経営方法や運営の仕組みを検討していくことになると思います。代替案がベストかどうかは、わかりませんが、会社清算案の色彩が濃い市活用案のほかに市民に選択肢を示すことが専門家の使命だと考えます。

6. 市民連携活動

①2020.11.29 第1回鶴岡フォーラム:「まちキネの存続と再生を願う会」主催、会場鶴岡 Dada
建築学における保存再生の第一人者、後藤治工学院大学理事長、ホールや映画館などの劇場建築のエキスパート上西明先生、若手建築家で鶴岡を愛する花沢淳先生などが専門的な見地からの意見、提案をしてくれました。先生方の提案の骨子は、(フォーラム当時はまだ残っていた)南側の大きな空き工場を社協の事務室などにすることで、無駄なクリアランス費用と改装費を抑える、またまちキネを存続させて、福祉と映画文化の相乗効果のあるまちづくりを行うというものでした。

また各地の建築の保存再生を支援している作家の森まゆみさんと保存再生の実践家中村出さんも駆けつけてくれました。

講演のあと、参加者30人(コロナ禍での限度人数)で議論を行い、提言「まちキネの創造的再生と中心市街地活性化のために」(2020.12.15 菊池俊一)がまとめられました。市活用案ではなくな

る予定の多目的ホールを壊さないで市民に開放してもらい、自主運営するという魅力的な提案です。
②2021.02.21 JUDI フォーラム(ZOOM):東北ブロック、北陸ブロック主催 (代表世話人:斎藤浩治、上坂達朗)

ZOOM会議となりましたが、多くの方々の参加で活発な意見交換がなされました。先の鶴岡フォーラムでの建築関係者の意見とは異なり、「建物を壊すわけではない。映画館はなくなるが時代に応じた次の活用が始まると考えたほうが良い」という、市活用案に近い意見も多くきかれました。一方では、ランニングベースで映画館が維持できるのに壊すのはもったいないという認識を前提に、関係機関の組織力学を踏まえての戦略的な提言も寄せられました。JUDIが多様で優秀な人材の宝庫であることを再認識しました。

③2021.03.20 第2回鶴岡フォーラム:「まちキネの存続と再生を願う会」主催 会場鶴岡 Dada
JUDI会員の皆さんはZOOM参加となりました。ここでは、後藤先生たちと相談したうえで、私のほうから、映画館の存続と再生を前提とする具体的な提案を行い、意見交換をしました。地元出身の映画弁士佐々木亜希子さんもZOOM参加してくれるなどコロナ禍の中では最大限多様な議論ができたと思います。

7. おわりに

北陸ブロック上坂氏が、議論の中で発せられた次の言葉を紹介して私の報告を終わります。

「こんな美しい建物をただの事務所にするなんてありえない。物の価値を理解できない人がすることだ」。

ガツンと頭をうたれました。長々と文章を書き連ねましたが、根底で私を動かしてきたのはこの思いだったのです。将来多くの人々にまちキネを残そうと思ってもらうためには、心の深い部分でこの思いが共有されることが必要です。言葉を変えると、まちキネが人々の共感を生む建築、場所であったのかが問われているのだと思います。

支援いただいたJUDIの皆様、とりわけ斎藤氏、上坂氏をはじめとする東北ブロックと北陸ブロックの皆様、どうもありがとうございました。

醱酵文化から読み解くまちの姿

～醱酵文化の魅力とまちづくりとの関係考察～

編集総括：東北ブロック 斉藤浩治
(東北ブロック+北陸ブロックの共同事業)

1. プロジェクトの目的

各地の発酵食品は、製造に不可欠な要素である塩と適度な湿気、そして地形と気候風土によって作られている。この成り立ちは地域ごとのまちの構造と密接な関係があると考えて、醱酵文化とまちの姿の関係を紐解く研究である。

また、江戸時代には全国各地から街道や舟運を通して発酵食品が運ばれたことから、流通のための施設(道や港)が果たした役割にも着目する。

なお、このプロジェクトは東北ブロックと北陸ブロックの共同事業である。

2. 活動の概要

今期は全国的なコロナ禍の影響によって、県境を越える移動の自粛が求められたため、予定した現地調査は十分には達成できていない。(唯一の現地調査として石川県白山市を探訪した。)

今期の活動の概要は下記の通りである。

(1) 情報収集活動

◇期間：2020年10月～2021年2月

- ・特徴のある醱酵食品を手掛かりとして各地の情報を収集。成果はリモート会議で報告。
- ・研究資料として、酒や醱酵食品を調達した。
- ・期間中は、リモート会議を3回実施した。

(2) 活動休止

◇期間：2021年3月～2021年6月

- ・緊急事態宣言期間につき活動を一旦休止した。
- ・期間中は、リモート会議を1回実施した。

(3) 醱酵文化のまち探訪(現地調査)

◇実施時期：2021年7月18日

- ・移動制限が厳しい中で、県内の移動であれば可能であると判断し、北陸ブロックメンバーによる石川県白山市の現地調査を実施した。

(4) 活動結果のまとめ

◇期間：2021年7月～8月

- ・収集した情報の体系的整理
- ・今期活動のまとめと報告書作成を行った。

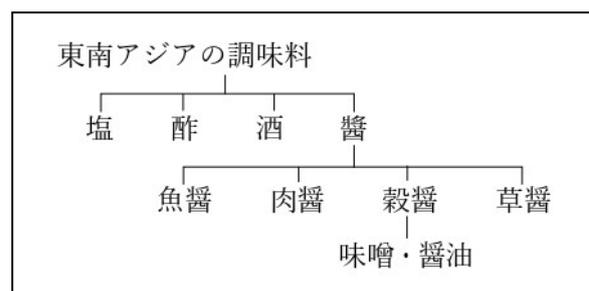
3. 醱酵の基礎知識

3-1. 醤(ひしお/ジャン)

東南アジアの4大調味料は、塩、酢、酒、醤である。我々日本人が日常食べている味噌と醤油は、「醤」という一大カテゴリーの中のツリーの三階層目にある極東のローカルフードである。

歴史的には、最も古くに肉から作り出した『肉醤』(にくしょう)があり、またほぼ同時期に『魚醤』(ぎょしょう)があったと言われる。味噌や醤油などのルーツである大豆からつくった『穀醤』(こくしょう)は歴史的には新しい調味料である。

(出典：食とアニミズム 玉利康延)



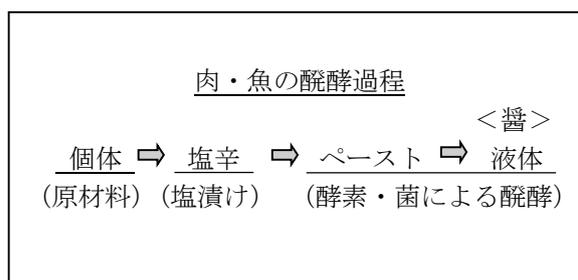
3-2. 醱酵の仕組み(動物系素材)

肉・魚の醱酵とは、酵素が肉の結合組織と筋肉組織を分解して、タンパク質がアミノ酸に分解されることを指している。

醤の生成過程においては、ほぼ完全に肉が溶けるまでが約半年から一年程度の時間を要する。

醤とはつまりタンパク質を塩漬け醱酵した物体の、個体寄りの状態か液体寄りの状態を言う。

また、大豆を原材料とするもの(味噌や醤油)は、肉魚より高度な分解技術が必要になる。



4. 土地の文脈から見た醱酵文化の分類

日本列島には多様な醱酵文化が根付いている。地域ごとに成り立ちも多様であるため、成立要因を踏まえずに一括りにすることは危険である。

また、古(いにしえ)から今日までの時間的な経過や時代背景も認識した上で評価すべきと考える。

醱酵文化の本質を捉えるために、土地(地勢)と気候による大局的な分類を行った。(下表)

注：土地の4分類は小倉氏による。気候分類と時間軸は斉藤加草。

土地	山(内陸)	島・半島	海(臨海)	街 (※街の定義が不明)
寒冷		塩魚介類 保存食(漬物,等)・流通しない		
温暖		小豆島 淡路島	貿易食(味噌,醤油)・流通する 魚介類 塩	
時間軸	● (最古)木簡の記録 730年頃 → 湯浅の醤油 1530年 → ヤマサ醤油 1645年 →			

(参考資料：醱酵デザイナー 小倉ヒラク氏の記事)

醱酵文化を分類する要素は下記の通りである。

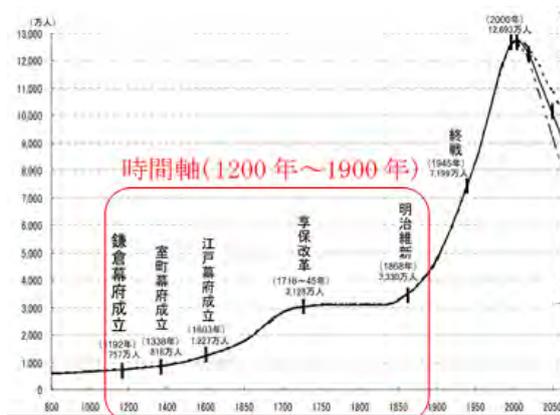
- A. 気候：**寒冷** **温暖**
 B. 土地：**山(内陸)** **島・半島** **海(臨海)** **街**

この要因のマトリックスから、醸造文化は大きく次の2つに分類できる。

分類1：移動しない保存食(漬物、保存食、等)
 ・寒冷な気候という厳しい環境を生き抜くために主菜や副菜の保存食として発達した。

分類2：移動する貿易食(味噌、醤油、等)
 ・温暖な気候のために保存食が発達せず、むしろ素材を美味しく食べる調味料が発達した。

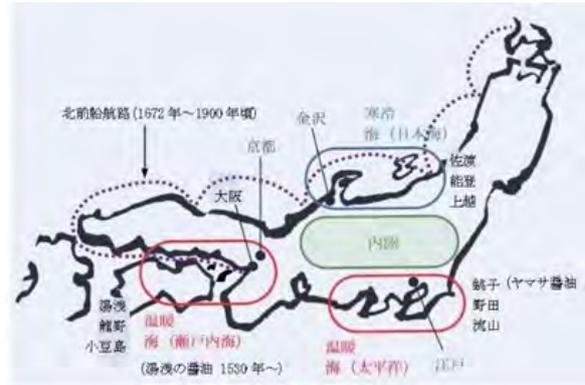
さらに分析する時間軸を下図のように設定した。時代によって人と物の移動(物流)が大きく異なり、醸造文化にも影響を及ぼすためである。



この研究で醱酵文化を考える時間軸

5. 特徴的な醱酵文化

土地の文脈による特徴的な醱酵文化を概観する。



今回の研究で取り上げた地域

5-1: 寒冷地域×島(半島)の醱酵文化

代表的な地域は、日本海側の北陸～東北地方の沿岸部(能登、佐渡、男鹿)の一带である。

時間軸では、北前船が発達する前の1600年代以前は移動しない保存食が発達した。代表的な醱酵食品が、能登では魚の糠漬け・こんか漬け、かぶらずし、佐渡では貝の味噌漬け、男鹿ではハタハタずし、などが挙げられる。また、北前船の舟運が発達して以降には、北海道からの海産物の流通などによって、石川県では珍味「フグの卵巣の糠漬け」が作られ始めたと言われている。

5-2: 温暖地域×島(半島)の醱酵文化 「近畿」

代表的な地域は、瀬戸内海に面した中国～近畿地方の一带である。温暖な地域の特徴として、一年を通して新鮮な食材が手に入ることから、保存ではなく食材を美味しくする調味料としての醱酵が発達した。この地域では古くから「酢」が醸造されている。酢は人間が作った最古の調味料と言われており、日本でも4～5世紀に中国から醸造技術が伝来し、和泉の国で作られ始めたという記録がある。さらには酢の醱酵で酒が造られた。

◇近畿地方の醤油醸造の歴史

紀伊半島の西岸に位置する湯浅町は、醤油醸造の町である。その歴史は古く鎌倉時代の1254年に高僧が中国から径山寺味噌の製法を伝えたことに由来する。やがて味噌づくりの過程で生じる液体が醤油の原型となったと言われる。その後、改良を重ねて1530年頃には生産量が拡大し、大阪への出荷が行われている。醸造に関わる蔵や建物が残る街並みは「重伝建保存地区」に認定され、2017年には「日本遺産」に認定された。山田川に面し

て通りと小路で区切られた特徴的な地割と、伝統的な建築群が今でも当時の面影を残している。



湯浅町の重伝建地区

また、兵庫県南部の龍野は、良質の小麦と大豆が周辺で生産され、かつ赤穂で生産される良質の塩に恵まれたことで醤油醸造が発展した。

【参考資料(1)：湯浅町探訪】

東北ブロック西山氏が、2019年度の研究として学生とともに街歩きした記録を掲載する。

◇探訪した主な施設

歴史的な街並みの趣を残したまま、新たな機能を付加して、まちの賑わいを創り出している。

- ・湯浅まちなみ交流館
- ・湯浅美味しいもん蔵
- ・JR湯浅駅と一体化した複合施設「湯浅えき蔵」



湯浅町まち歩きの様子

5-3: 温暖地域×島(半島)の醗酵文化「関東」

関東地方の醤油生産地は、銚子(ヤマサ、ヒゲタ)と野田(キッコマン)である。その起源は、銚子の豪農が酒造家の勧めで、1616年に醤油醸造を始めたのが関東最古の醤油業と言われている。

ヤマサは創業者が紀州湯浅の近郊出身で、紀州から銚子に渡り1645年に醤油業を創業した。その後この地域の醤油生産は拡大を続けて、現在、千葉県は生産量で全国第1位となっている。

野田と銚子が醤油生産量を伸ばした背景には、大都市(消費地)江戸に近く、利根川による物資の輸送が良かったことにある。



野田の街並み

【参考資料(2)：銚子市探訪】

東北ブロック西山氏が、2019年度の研究として学生とともに街歩きした記録を掲載する。

◇探訪した主な施設

- ・崎山次郎右衛門による外川地区の町割り探訪
- ・ヤマサ醤油工場見学



銚子市まち歩きの様子

6. 醱酵文化のまち探訪（石川県白山市）

今期の活動によるまち探訪の記録を以下に示す。

6-1. 調査の概要

- ・調査日時：2021年7月18日(日)
- ・調査場所：石川県白山市（美川、鶴来）
- ・参加メンバー：北陸ブロック埴氏、他4名
- ・調査概要：白山市は「フグの卵巣の糠漬け」が有名な街であるが、その他に酒・味噌・醤油・酢など多くの醸造工場が存在する醱酵文化の街である。

6-2. 美川の醱酵文化

◇地域概要

- ・美川の市街地は、白山市の沿岸部の手取川扇状地に形成されており、白山連峰を源とする伏流水が豊富である。市内には井戸も多い。水質はミネラルを適度に含んだ軟水であり、醸造にも活用されている。
- ・伏流水が湧き出る川や池には、湧水のシンボルと言われる淡水魚の「トミヨ」が生息している。



市内に点在する湧水

◇工場見学(あら与・フグの糠漬け)

- ・あら与は、1830年創業。現社長で7代目。
- ・フグの卵巣の糠漬けは安政5年(1858)頃から始まった。北前船の寄港地として、北海道や日本海沿岸各地から良い素材が集まった。
- ・製造法は、卵巣を塩漬けしてから鰯の魚醤を注ぎ続ける。1年半で無毒化できるが、3年寝かして味をまろやかにする。無毒化の仕組みは不明。
- ・糠漬けには木桶を使用する。桶の蓋の藁はクッションの役割だが、稲作の機械化によって入手が困難になっている。
- ・醱酵が進むと木桶の表面がピンク色になる。これは細菌の発色でありフラミンゴと同じ色だ、と東京農大の小泉武夫先生が言ったという。
- ・また、白山市全域がジオパークに認定されており、全てが自然物(木材、石、海産物、等)によって作

られる糠漬けもその特徴を良く表している。



木桶に鰯の魚醤を注ぐ荒木社長

6-3. 鶴来の醱酵文化

◇地域概要

- ・鶴来は手取川扇状地の上部に位置しており、古来から山間地と平地を結ぶ要所として、農産物の取引がされてきた。
- ・ここは四大醸造(酒、味噌、醤油、酢)がある町として全国でも稀な存在である。今回の探訪では、醸造に欠かせない「糶」を対象とした。

◇見学および聞き取り調査(糶屋・武久商店)

- ・武久商店は江戸時代末期に操業。現在6代目。
- ・糶屋はかつて鶴来に8~9件あったが現在は3件。そのうち糶のみを扱うのは武久商店のみである。
- ・糶づくりは酒づくりに似ており、温度や湿度の管理が重要である。ここは温度が安定する(17℃)地下の石室で製造している。1回あたり4日間をかける。
- ・販売は、店頭で6割、スーパー4割。全国から依頼があり、量は少ないが増加傾向にある。
- ・近年、若い人たちがグループを作って自家製味噌をつくり始めていることは喜ばしい。



武久商店外観



店主の武さんの説明

◇市内散策

鶴来町内の主な醸造関連施設を見学した。

- ・小堀酒造店(萬歳楽)・菊姫酒造(菊姫)
 - ・吉田屋(味噌・醤油)・横町うらら館(休憩所)
- 当日は猛暑の一日であったが、情緒あふれる街並みを存分に堪能することができた。

以上

【注：このプロジェクトは来期も継続する予定です。】

都心居住時代のコミュニティの場としての都市公園の研究 ～大阪市扇町公園を事例にして～

関西ブロック 岸田文夫

1. 研究の概要と体制

大阪市北区にある都市公園「扇町公園」を事例に、都心コミュニティの場としての公園のあり方を検討し、大阪市のマーケットサウンド調査に提案するとともに、シンポジウムを開催した。

NPO 法人もうひとつの旅クラブのメンバーに学識者2名を加えた研究会を組成し検討を実施した。

2. 民活による大阪市の公園活用施策

大阪市において2015年度から実施された「大阪城公園パークマネジメント事業」と「天王寺公園エントランスエリア『てんしば』」の2つの先駆的事例は、官民連携の成功事例として評価され、2017年に Park-PFI 制度が制定される契機のひとつとなった。

そのため、大阪市は今後も民間の資金、ノウハウを活用し、公園の集客エリア化を進めていく方針で、2019年には大阪市内の11か所の大規模な都市公園について、民間事業者に具体的なアイデアを募っている。公園のにぎわい活用が注目される余りに、都市における公園の空間的な意義が軽視される懸念があることは否めない。

3. 扇町公園の現状と課題

広さ約7.3ha。プールと体育館、地下駐車場がある他、大阪市北区役所、北区民センター、キッズプラザ大阪、関西テレビと隣接。地下鉄、JRの鉄道駅や商店街からも近い。一方で、使われなくなり放置されている水盤跡や噴水、利用イメージのない不気味な植栽エリアの存在(公園南東部、北西部等)、管理の行き届いていない植栽や遊具などの課題がある。(2019/7 フィールドワーク)

4. 研究会で出された論点

① 都心居住と新たなコミュニティ

2000年代から著しさを増した都心居住の流れの下で、梅田周縁部では仕事と遊びの領域が混ざり合い、相互に作用しはじめており、仕事を含む暮らしにまつわる様々な活動におけるコミュニティ、ネットワーキングへの希求が高まっている。

本格的な都心居住時代の到来は、コミュニティ領域において、地縁だけではない場所と時間を超えた『縁』のニーズを高めている。

② 扇町公園の価値化

梅田周縁部としての文化交流ニーズの高まりや



研究会の様子



フィールドワークの様子



マーケットサウンディング提案資料

防災拠点としての重要性の高まり、子どもミュージアム「キッズプラザ」との連担性向上の可能性、キッズプラザを背景にした視覚的な訴求力、高稼働の北区民センターの学びのコミュニティの存在と学びのフィールドとしての可能性、プール等によるスポーツコミュニティの存在などのポテンシャルがあり、こうした資源の活用で、暮らし・学び・楽しみ等の新しい時代のコミュニティニーズを紡ぎ出し、防災拠点へ日常的な親しみと学びのコミュニティを誘発する具体的な行動を導くべき。

5. マーケットサウンディングでの提案

①事業コンセプト

『公園で出会う新たな学び「扇町マナビバ」』

②「扇町マナビバ」の機能

- ・地域ニーズの高まりに対応した保育園エリア
～社会福祉法人等が運営する民間認可保育園
- ・WSエリア「マチ農場」～学びや文化と地域が結ばれるアウトドア型の交流スペース
- ・マナビバカフェ～保育園エリアとWSエリアをつなぐ機能空間

6. フォーラム「扇町マナビバ」の開催

①開催概要

- ・日時：2020年11月21日（土）13～17時
- ・会場：北区民センター大ホール/79名参加
- ・問題提起：記憶と創造「大阪百景⇄未来景」
橋爪節也氏（アート・都市文化/大学教授）
- ・セッション：岸上純子氏（建築家/扇町公園愛好家）/武田重昭氏（ランドスケープ/大学准教授/*）/堤道明氏（セレッソ大阪理事）/泉英明氏（研究会/まちづくりコンサル）/福田知弘氏（研究会/大学准教授/*）*JUDI 会員



フォーラム「扇町マナビバ」会場風景

②主な議論

【都市公園の意義】

公園には「存在効果」、「利用効果」、「波及効果」があるが、最近は利用効果をいかに発現させるかという賑わい至上主義になっているのではないかと。コミュニティの形成、シビックプライドの醸成にもしっかりと焦点をあてるべき。

消費行為の拡大に依るのでは、公園の公益性の観点を持続的に維持できないことが問題になる。

【扇町公園の魅力・可能性】

固定的な商業施設は似合わない。みんなが関われる余地のある場所として、公園の維持管理を楽しむながら自分事のようにできることが大切。

どんな公園をつくりたいか、ではなく、公園であなたは何がしたいかが大切。何かしたい人が集まると自分も参加して貢献できる事が増えていく。

周囲の土地利用はごちゃまぜなので、多様性を許容するパートナーシップの組み方が面白い。

【これからの都市公園のあり方に向けて】

行政が大きな企業に運営を任せている事例と住民が完全にボランティアで運営している事例のいずれしかなく、その中間がない。

外から消費者を呼び込むのではなく、そこに暮らす一般の方々が生産者となり、まちの魅力を付加していく、時間をかけたまちづくりの方が魅力的なまちづくりの近道ではないか。

7. 研究の成果と今後

研究会が提案した「扇町マナビバ」のコンセプトは、シンポジウムでの発信も通じて大阪市の生涯学習情報誌に紹介され一定の認知を得た。

また、北区民センターでは扇町マナビバの実現に向けて、自主イベントの予算を複数年で確保されたことから今後も活動を継続していきたい。



大阪市生涯学習情報誌への掲載